

# 飛雲

季は	地は	シテ	ワキ	前
秋	信濃	鬼神	ツレ	ワキ 熊野の山伏
			前に同じ	ツレ 同行の山伏

「遙けき国を三熊野の。」。苔路や旅の始めなる。

詞 「是は本山三熊野の山伏にて候。我未だ羽黒山に参

らず候ふ程に。唯今羽州に下向仕り候。

道行 「行く末も。遠山伏の摺衣。」。遙々来ぬる旅を

しそ。思ひの末も幾日数。幾夜重なる麻衣。木曾の掛橋谷深み。かけぢの末も暮れかゝる。雲の

八重山いかばかり。」。

詞 「急ぎ候ふ程に。是はゝや木曾路に着きて候。暫く

此所に休まうずるにて候。

シテ一聲 「馴れつゝも。妻木の道の苦しきや。重なる老の坂ならん。」

詞 「余りに苦しう候ふ程に。薪を下し休まばやと思ひ候。」

ワキ詞 「不思議やな是なる山賤を見れば。所こそ多きに。分きて紅葉の陰に休む氣色。心有り顔にて優しうこそ候へ。」

シテ

「本より賤しき賤の男の。何の心の候ふべき。彼黒  
主が歌の心は。薪を負へる山人の。花の木陰に休  
むけしきを。残し置きたる筆の跡。我等が休む  
も紅葉の木陰。いたづら事にて候ふなり。

ワキ  
「實に心ある答へかな。先々紅葉の名所々々。彼方  
此方に多けれども。彼業平の心には。神代も聞か  
ずと言ひ置きし。

シテ  
「名にも龍田の紅葉の色。

ワキ  
「初瀬の山は檜原が木の間に。色洩れ出づる村紅葉。  
シテ  
「又は八塩の岡のもみぢ葉。

ワキ  
「其外高雄。

シテ  
「嵐山。

地  
「色々を。四方に染めなす秋の日の。く。朝には  
雪としぐれ。夕べには雨とそゝぎ。このもかのも  
の草木の。はや下染も時過ぎて。百入千入に薄き  
濃き。梢の秋は面白や。

シテ  
「白露も。

地  
「白露も。時雨もいたく漏る山は。下葉残らぬもみ  
ぢ葉を。片敷く今宵山伏の。一夜を明かし給はゞ。  
我も帰りて夜もすがら。夜遊を慰め申さんと。谷  
の戸深く入りにけり。く。

ワキ  
「あら恐ろしの気色やな。小夜も半に更方の。

ツレ  
「月影闇き山中に。

ワキ  
「行くべき方もあらざれば。

ツレ  
「頼みを掛けて。

ツレ  
「あらたなりける夢の告と。

ワキ  
「頼みを掛けて。

ツレ  
「読誦する。

二人  
「南無や開山役の優婆塞。殊には三熊野三所権現。

力を添へてたび給へ。

地  
「不思議や峨々たる石根に。く。黒雲一村起ると  
見えしが。谷峰一同に響き震動し。磐石を碎き木  
を折る嵐に。先立ち飛雲の光りの内に。顕はれ出

づる鬼神の姿。面をむくべき様ぞなき。

ワキ 「東方に降三世明王。

ツレ 「南方に軍荼利夜叉明王。

ワキ 「西方に大威徳明王。

ツレ 「北方に金剛夜叉明王。

ワキ 「中央に大日大聖不動明王。

二人 「唵呼嚕々々旋荼利摩登枳。唵阿毘羅吽劍蘇嚙訶。

地 「鬼神の通力忽ちに。く。明王の繫縛にかかると

見えしが。飛行をなして上らんとすれども。大地に斃れ伏し起きつまろびつ。おのれと身を責め苦しむ氣色に。行者の威力いよく増さり。数珠さらくと押しもんと。見我身者發菩提心。く。  
聞我名者断惡修善。聽我說者得大智恵。智我心者即身成仏。即身成仏と祈り伏せ。行者は遙かに立ち退けば。

シテ 「不思議や今までは。

地  
「不思議や今まで。大勢力の鬼神と見えしが。立ちどころに弱り伏して。唯茫然と起き上りて。たゞよひ行くと見えつるが。有りつる姿は雲煙。有りつる姿は雲煙と。立ち消えて。鬼神の姿は失せにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第八輯』大和田建樹著